先週の土曜日、「物語の世界へ　２０２３」と題する、語り・朗読の会にお邪魔をしました。主催者は、本校ＯＢのＡ先生。

昔からＡ先生は、ほれぼれするような達筆でした。さらさらっと書いているのに、Ａ先生からだ！と、すぐに分かる懐かしい字。万年筆で書かれたお誘いを頂戴し、勇んで出かけました。

Ａ先生の語りは、オー・ヘンリーの『警官と讃美歌』。他の方々が朗読『賢者の贈り物』を披露してくださり、ピアノ演奏もありました。演者・参加者全員で「きよしこの夜」も歌い、しばし師走の慌ただしさを忘れ、あたたかでやわらかなひと時を過ごすことができ、なんだかとても得をした気分に浸れました。

Ａ先生のけれん味のない、淡々とした、いぶし銀の語りに、物語の主人公、ソーピーの様子やニューヨークの街並み、登場人物の息遣いが伝わってくるようでした。

ソーピーはニューヨークマディソン広場のベンチで震えるホームレス。厳冬の三か月の間、寒さをしのげ、食事にも困らない刑務所に入ろうと計画を立てます。

高級レストランで無銭飲食をして逮捕されようとしますが、店員にくたびれたズボンとボロボロの靴を見られてしまい、つまみ出されてしまいます。その後他の店のショーウィンドウに石を投げつけて割ったり、大衆向けの食堂で無銭飲食をし、「警察を呼べ。紳士様を待たせるんじゃないよ！」と、うそぶいてみせたりもしました。さらに警察官の前で、わざと逮捕されるようなことをしても、まるで魔法にかかったようにすべてが空振り。

そして行き着いたのが古びた教会。中からは、讃美歌の曲の演奏が聞こえてきます。昔よく歌った讃美歌。母親、バラの花、純真な心。友人。それらのことが、走馬灯のようによみがえってきました。真人間に戻ろう。時間はある。まだ若い。そうだ、かつて毛皮商が運転手を探していたっけ。明日はその人を尋ねて、仕事をもらおう！と、決意を固めたと同時に、誰かに腕をつかまれます。

慌てて振り向くと、そこには警官が…。

突然ですが、毎年十二月十日は、ノーベル賞の授賞式が行われる日です。今年は、残念ながら日本人の受賞者いなかったためか、ほとんど国内では報道されていなかったようです。ご存じのように、ノーベル賞は、ニトログリセリンからダイナマイトを発明したスウェーデンのアルフレッド・ノーベルが創設した賞です。

ノーベルの発明したダイナマイトは、トンネルを掘る工事などに用いられ、素晴らしい効果を発揮します。その後、ダイナマイトは戦争で使用されるようになり、売れに売れ、ノーベルは巨万の富を得ることに。自分の発明が、平和と人類の幸福に役立つことを望んでいたノーベルは、戦争に自分の発明が利用されることを悔いて、「自分の全財産を基金に当て、その利子を賞として、毎年、その前年に人類に最大の寄与をした者に授与する。この利子は五等分し、物理学、化学、生理学・医学、文学、平和のために最善を尽くした者に与える。」という遺言をします。その後に「経済学」が追加され、六分野となりますが、経済学は正式にはノーベル賞ではなくて、「アルフレッド・ノーベル記念　スウェーデン国立銀行賞」と称されるようです。

ノーベル賞の授与式が何で十二月十日なのかというと、この日がノーベルの命日だからです。正確に言うと一八九六年十二月十日。

ノーベルは晩年、狭心症による胸部の激しい痛みの発作に度々襲われていたようです。当時の医師は、ニトログリセリンに狭心症の症状を抑える働きがあることを、理論的には分からずとも知っていました。医師にニトログリセリンを経口薬として処方されたノーベルは、「何という運命のいたずらだろう。」と、同僚宛の手紙に書き残したのだそうです。

運命のいたずら。ソーピーもノーベルも、それを嘆いていたのでしょうか…。

（立教小学校校長　田代　正行）